



和歌削の洞

全





竹  
心

四隅のほらみはたれちかみれたもの  
友らら紅葉とかがし月とめて舞よ  
つばよを別ひあそまされの頑が俗老  
乃墨染とよられたうまよ好て  
移しきぬ枕うはれくよは書とら  
其中よいさう金言玉とくくやく  
まよまされと性ぢり味多れん和奇

乃浦の玉も捨すし所はくたつ  
ねまらんよもさうし志あれと  
けらよ倦とめくして頃も耳底  
記よみ板行の物とらりあつらん  
しえ達乃義言た大切のあつらん  
そめ奥よな生何人の作意よめ  
近代制の詞の中舞と入らさる

わがしやうある灯のちよ支願と  
はしくなまよふらうりす  
舞書と辛して字のよめ詠哥  
一体とよそく久しく世にきく  
あしと思ひは是く遼東の  
永まりとあそむる校合するよ  
る携しよの本の耳底よみ

松竹といふ草乃いふ草なり  
乃と物して益あり所く撰  
出れり草乃戸に未訪ぬ  
くくよのやあ送る人と思と老  
乃筆行るいも覚束ぬくひ  
くかんそくく一かか  
まひんあしぬ人のきよあ

まねうとたれひ梓了 鑄了  
まのよめ

洛東阜住

祖隆

和哥袖中

詠哥一体

け比人のよみ出たん詞更く  
よむ(うら)ん

一震りねら

家隆

今朝えれは雲も梯と埋りて  
震らねらるみよ(うら)ん

一花の若を

家隆

田舎の宿を野分うらむ  
花の宿を野分うらむ

一花の若を

具親

難波の宿を野分うらむ  
うつろふ宿を野分うらむ

一花の若を

家隆

相馬の本宿の花を野分うらむ

あつろふ宿を野分うらむ

一月の若を

讚波

山高の宿を野分うらむ

月よあつろふ宿を野分うらむ

一花の若を

寂蓮

暮の宿を野分うらむ

花の宿を野分うらむ

一花の香ら

栞政

野山をぬる古亭あふたそ

一花の香ら 春風をよ

一花の露をよ

俊成

駒をたてし松水をいん山吹の

一花の露をよ 井子の玉川

一花の香ら

月

まもるんがらぬ 中野の栞がら

一花の香ら 春のわけほの

一花の香ら

大輔

春風の霞のやうに 絶まらうり

一花の香ら 青柳の糸

一花の玉水

式子

山あふる春をよ 急松の戸を

たしつがゆき雲の玉水

一 ちしつがゆき

守覚法親王

吉野山をぬきてふもやまの

をたしつがゆき

一 波よたしつ

家隆

霞の末のまの山はのり

波よたしつがゆき横雲のり

友

一 何やめえうる

友

一 何くくもる

西行

よれる野毛せの草のうけ

何くくもる夕立の空

友

一 雨の夕立

栞政

打たれあやうかほる部

鳴やみ月乃ぬの夕立

秋

一 鳴やみ月乃ぬの夕立

定家



小倉山時雨はけの朝みく  
まろよらうすこ峰の紅葉

一巻の巻たれん

家隆

露しぬれもる山溪の下紅葉

ちると色たれん秋の夕暮

一巻の巻たれん

家隆

下紅葉がのちる山夕夕

あれてやびらり麻乃つらん

一巻の巻たれん

知家

あらしをたれらり秋風

あれてやびらり麻の妻やまらん

一巻の巻たれん

俊成

鶉なかく岡野へ入口の候風よ

あらしをたれらり秋の夕暮

一霧のうらさる

式子

坪をみだ庭乃後弟は持たれ

露のそこの松のしる声

一月やわらさる

家隆

秋のれ月やと表天のそ

のうらさる仲のつり舟

一とめる信り

俊成

一日

あすもえん野路乃玉川あけて

とよまはあよ月やさるり

後鳥羽院

玉川乃きりの山吹うけんとて

とよめる信よかえりあそ

一霧らのの

寂蓮

村雨のはあまきさるね松のそた

芳たらののり秋の夕れ  
しんぶん 譜後

冬  
あかほは紅葉の多うもまね  
わかれふるふる山川の水  
しんぶん 高内

田川あしあなまのうら  
しんぶんあなまのうら

しんぶん 家隆

志賀の浦や遠はうらけは  
しんぶんあなまのうら

しんぶん 定家

小初瀬やののそねんは吹雪  
あしあなまのうら

しんぶん 藤田

中よ雨物ねも油のよら世は  
木葉のしらに何とぞあはま

一雪の夕ぐれ 定家

動ごころし神らもらふ際し所  
作野くわりの雪れ夕ぐれ

一雪の夕ぐれ 橋政

毛くすまよ雪のわら峰れ初時雨

木の葉へ下にふりかゝるる

一雪の夕ぐれ 宗徳院

瀬とくもさよまてらるる龍川の  
こゝれとくもさよまてらるる野

一雪の夕ぐれ 定家

消候ぬららふ人の秋のまきり  
身と木がりの木の下の露

一袖と浪の

讃岐

らんあて地いりらん浪のまの光  
袖とみれ下に朽ぬ

一ぬくも神の

後鳥羽院

我意は模のうまよさる可ぬ  
ぬくも神のまよさる

一銭のこまらて

式部

銭のこまらて  
銭のこまらてくさる月日と

一結とぬ水

公實

思あまら人よとく水無川  
結とぬ水ぬあし袖あふと

一たあき入

後鳥羽院

田原のこまら年(う)の

たれあしゆの夕ぐれの色

「我身にかこみ

前入大徳院

富士の根の雪より今海より

赤芽の雪をみむらじ増え

「まのよの雪を

家隆

ねまじゆは誰 ねまのまみん

まのよの雪の跡のしら雪

雜

「まのよの雪を

家隆

あまの雪の跡のしら雪

まのよの雪の跡のしら雪

「月もあつめ

崇徳院

かり衣袖の月をみる夜は

月もあつめあつめあつめ

「月もあつめ

俊成

雜

まろのこころをまろくせん松の  
よもよもよもよもよもよもよも

一あつてもつふ

大上天皇

みろくろくさぬ御らりりりりりり  
けいけいけいけいけいけいけいけい

一舞うり

紀實

山たうとたたうととととととととと  
うううううううううううううう

董もほまぬ

白の丸をたつ

あつて夜

こけはれおとつ八柳

玉のと柳

つらつら

芥つむおのの葉の

栞ちる

花とてしと也

春

たけや霞

雪の下木

春乃朝明

集

私よ白是よりたよとるひよの  
割の朝ハ耳底記つるしと詠  
哥一林の趣大様かたのこと

うすき庭

春とまらぬ

おけきのさる

秋乃朝明  
月乃好光と  
抱ききく

かき耐鳥  
夕暮る  
ほろとあつと  
夕暮る

雑生  
秋  
露乃夕暮

露乃夕暮

霧乃有明

霧乃有明

夕暮の秋

夕暮の秋

紅葉はら

紅葉はら

ひと時反

冬

木枯の声

霜とみん

雪とみん

白雪たまり

雪乃夕暮

雪乃夕暮

時雨 時雨の道よあどすね

身よりけえ  
窓

よあめ夕暮



あさけ

雑

おのろい

其

やんまのせき

おれきた

谷川の浪

何れおれ

春よの僧原

大井川浪

おんれおれ

吹あし

のほりせ

わろ月け

三月の里

日

今ありあり

あしあし

おのろい

むんろん

おのろい

おのろい

おのろい

おのろい

おのろい

まろろ

おのろい

おのろい

おのろい

おのろい

おのろい

おのろい

おのろい

おのろい

おのろい

おのろい

おのろい

おのろい

おのろい

おのろい

おのろい

おのろい

おのろい

志ろき  
あつとぎ

あつとぎ  
物まうまろ  
とれり

あつとぎ  
あつとぎ  
ういり

右に朱点朱書

武有京路宰相殿  
御本とひて写

書

大伴良長卿の牙左借思成仕  
写書く本とひてつ味仕書也  
享保五年三月印

一あつとぎの題は風とひつとる也  
色といふは焼あり

あつとぎの表かき事にあつとぎの  
あつとぎの表かき事にあつとぎの  
あつとぎの表かき事にあつとぎの

一詩のい ちよとひつとる

一老といふ月あつとぎ人あつとぎ  
とめよとひつとる

一奇の余勢あつとぎあつとぎ

あつとぎあつとぎあつとぎ

あつとぎあつとぎあつとぎ

あつとぎあつとぎあつとぎ

とてんとぬ、あつるうけなるぬ人  
りまひたり

一 尋らやうとつぬんよ古今才一  
詞よなして不審とひくここの後  
るいふらう一たこ後成かこ人尋よ  
この世下りくこ

一 勅撰よ入ら尋みんこよひきり  
ぬ月をよ梅よひくこぬ又近ま

世乃人の歌の羽とらるんこ

一 月う花りあてあまうらう一常のぬ  
ひくこ

一 どののらよ春の年よまら袖ひらて  
ひきひくこ月やあぬ春のびり  
柄らるる小下らんを渡へり次

一 題とよら句よ盡一なるうら他  
題の尋数よまむよ功のありにせ

うんちあつらひさうか

一花の題はたれとてか月の題はあ  
つきの月とてむらさ

一花のなまはたしとておぼえられたま  
まみらやまきんふんじくあま  
よあそてたお紫のあんとてい  
色海

一花の情あはれとていふはたつ

あつらひさうと難せらるゝとされは  
句と下は所下は句とよまひて  
紫すく圓くまの月ハ二字ニま  
みれも耳はたの三十一字あり  
けりゆあり一白のうらがんが  
まうとてを詮す  
私曰是  
採并一休の扱ふあり制乃復の  
内近代上り方よあそて次河想  
うりされとてよあそてはり

天の恐れは口とて川を往日及古の  
くはにのれとあり幸とよとあまの心  
紙の端つらこよとるす

一色より香るる衣れとたのめ  
誰神よきく宿の梅るし

漢仙記 銀袖白移梅花古情留

私日銀袖ハ漢ハ武帝の后ウ銀  
乃袖香梅花よ移こころを下し

日本是卿辞帝都 征帆一片達蓬壺

明月不還沉碧海 白雲秋色滿蒼梧

予漢書よ益うとをれハ何まの書  
よ此らとこしあふとふハ推あふよ  
思ふこころ是卿ハ安倍仲丸よてハ  
あまの仲丸唐使よまかり帰朝よ  
及人く別まて情と悔過よ出て  
酒と進り餞別の詩とあつとふ

とく人のたぬりまう南乃るあやう。  
おほも退て愚案とあらうはな

天乃るあやうはけしかりするあやう

かろつたれやまは 却し月数

詩哥乃の面影一致のやうし時仲

丸の中よけお舞と詠するよくと思

惟すりのたけをまにんよる予白

よ文首こ公さたいたはらひ書

お有下<sup>ま</sup>寝乃博字よにうらま

足下よりきて咲よすまれ物とく

愚者といふ智より救ひて教ふる

一板切もあはれ思ふ他人の許より

世に大方秘せらぬと借て徒然乃

おくつこととちてんるにむ書ハ

何れも書よしせば作者思ひの

有正の詞より引いてまよふて  
き後生乃達人今業の註根  
乃意趣あり誠よの空なる物  
まは善の善なる其邊ひくは道  
乃奥儀と有難し亦草木禽獸  
の名よ至りてまよふれ餘説  
昆乱して取とひらるる是六  
いふやけく思ふ事と乃

至極はとく凡夫のいふおぼ  
きて常後乃事の名人たより  
原く門カくは相乗しあふま  
まけらり言まひりつるも思れ  
と然れも然然と世はれん  
月と思ひてまを説と書よの  
しるしとてまのあしはれは井  
乃知といて不可といふをん

國々里々の習草木魚身の名替  
と之も改むる時ハ明らむとて  
とら鳴呼くくら行らむとらよ  
とらハ明白らん世よ名醫藥種  
はよよ一素よ其名品くると  
とらハ漢月る本の名毛頭相違  
とらと一與の凡流とていふと  
世すとらんハ情と一和哥ハ日本

凡俗神代よりと奔り今よ至ると  
素と大内子残まり正一き道よ  
何の疑り一きと有人やと思ふ  
く古人乃千詞方言よ屈度す  
ハ例の愚意一室の私よりて天  
下乃公論よ有らむと

一世ハ鳴徹の古人す評とあけらね  
おいて是と是とれとてと一交



是より以て其の藝なる所を以て其の  
こと有る多し其の取らるる  
は史すなり其の事と云ふは  
他す昔の歌人筆と扱はれしを  
今一棄して云あつて其の学は矩  
模と寝よいと其邪よ誰か詞と云  
はん 予古老よ同如何核し  
諸藝は其の事なりと教養は日

藝といふ文字は其の事と訓より六藝  
分きて一方能と云ふ先は此の他并  
言なり予は其の習すことと  
しるしと遅きは亦一乃主人とのこと  
合点せよと故より教返すことと  
一不亂よ云ふことと事の時得ること  
と云ふ一學問の及ぶことと理才と  
筆力と云ふことと計つことと巧ことと繪

書出とて其人其人は非ざるは君の  
用ゆるるも他を而作の枝葉の  
すくまり藝のたのむるあり一  
正一も是とぬくあり一

延寶九天估洗下旬

中村孫兵衛板



徳  
中

